

A 語句の意味と読み

- (1) 折／とき・場合・ちょうどそのとき。／「急ぐことあるをり」＝急ぎの用事があるとき
- (2) 長話。だらだらと長くしゃべること。／「長言するまらうど」＝長話をする客
- (3) まらうど／客・来客。訪ねて来る人。／歴史的仮名遣いの「らう」は現代仮名遣いで「ろう」になる
- (4) 軽く見る。見くびる。あなどる。／「あなづりやすき人」＝気がねなく軽く扱える相手
- (5) (相手が立派で)こちらが気おくれする。気がひけるほど立派だ。／自分が恥ずかしいのではなく、相手がりっぱすぎてこちらが引け目を感じる、の意
- (6) にくし＝しゃくにさわる・いやだ・気にくわない／むつかし＝不愉快だ・うとうしい・わずらわしい。／現代語の「憎い」「難しい」ではない。にくしは憎悪ほど強くない不快感
- (7) 眠い。眠たい。／現代語「眠い」の古い形。同じ段の「ねぶり声」も同じ語から

B 文法

- (8) 「やり」＝ラ行四段活用動詞「やる(帰らせる・追いやる)」の連用形／「つ」＝強意(確述)の助動詞「つ」の終止形／「べけれ」＝可能の助動詞「べし」の已然形(教科書によっては強い推量とする)／「ど」＝逆接の接続助詞。／「べし」の意味は、可能(～できる)とする教科書と、強い推量(～してしまうだろう)とする教科書がある。お使いの教科書の説明に合わせる
- (9) 下に推量の助動詞「べし」が続いているから。「つべし」「ぬべし」の形では、「つ」「ぬ」は完了ではなく強意(確述)となり、「きっと～・～てしまうにちがいない」と下の語を強める働きになる。／「つべし」「ぬべし」はセットで覚える
- (10) 助動詞「る」の連用形。受身(～られる)の意味。／「する(磨る)」はラ行四段。その未然形「すら」＋受身の助動詞「る」の連用形「れ」。サ変なら「せらる」の形になるので、ここを「らる」と答えると×。(人に)墨をすられている、という意味。続く「たる」は完了・存続の助動詞「たり」の連体形
- (11) 「あらむ」(「にやあらむ」の形になる)。／断定の助動詞「なり」の連用形「に」＋係助詞「や」。結びの「あらむ」を言わ

ずに止める形で、「～であろうか」の意

(12) 形容動詞「わびしげなり」、ナリ活用、連用形。／形容詞の語幹＋「げ」で「～そうな様子だ」という形容動詞をつくる

(13) 係助詞＝こそ／結びの語＝にくけれ／已然形。／「こそ」の結びは已然形。ク活用形容詞「にくし」の已然形が「にくけれ」。終止形「にくし」と書く×

C 主語・指す内容

(14) 作者(清少納言)。／あなどりやすい相手＝軽く扱える客の場合の話。直後の「さすがに心恥づかしき人」は、この逆の場合を言っている

(15) やっと呼んできた験者が、このごろ物の怪を相手にしてばかりで疲れきってしまっているのだろうか、と作者が推し量っている。／「～にや(あらむ)」＝～なのだろうか、という作者の推量

(16) 作者(清少納言)自身。／「にくきもの」は、作者自身が日ごろ体験して感じたこととして書かれている

(17) 蚊の(小さな)体の大きさ。／「あんなに小さい体なのに、羽風だけは体相応にある」という言い方

D 口語訳

(18) 気がねなく扱える相手ならば、「またあとで」とでも言って帰してしまえるだろうけれど。／「とて」＝～と言って／「つべし」＝きっと～できる

(19) 急に病気で苦しむ人があるので、(物の怪を退ける)験者を探し求めると、／「わづらふ」＝病気で苦しむ／「あるに」「求むるに」の「に」が二つとも接続助詞(～ので・～したところ)。傍線⑨「にはかに」の「に」は形容動詞「にはかなり」の連用形の活用語尾なので、これは数えない

(20) やっとのことで(験者を)待ちうけてつかまえて、喜びながら加持祈祷をさせると。／「加持す」(サ変動詞)の未然形「加持せ」＋使役の助動詞「さす」の連体形「さする」。「(験者に)加持をさせる」の意

(21) (細い声で鳴くだけでもいやなのに、)羽ばたきの起こす風までもがその体の大きさ相応にあるのは、たいそうしゃくにさわる。／「さへ」＝添加の副助詞で「～までも」。「こそ…にくけれ」は強調の係り結びなので、訳では強く言い切る

E 内容・記述

(22) 気おくれする立派な客で、長話をされても追いつけず、我慢して聞くほかないから。(三十八字) / 「あなづりやすき人ならば…やりつべけれど」と対して読む

(23) 急病人のためにやっと探し当てた験者が、座るなり眠そうな声を出したところ。(三十六字) / 「からうじて待ちつけて、よろこびながら」という期待の高まりが根拠

(24) 擬人法。蚊が鳴くのを、人が自分の名を告げるように「名のる」と言い表し、さらに「わびしげに」と蚊の気持ちまで描くことで、小さな蚊のうるさをユーモラスにとらえている。 / 「わびしげに」＝いかにも心細そうに

(25) どれも日常のささいな出来事で、自分の思いどおりにならない小さな不快さである点。(三十九字) / 客・硯と墨・験者・蚊・蚤と、どれも身近な「あるある」で、大事件ではない

F 文学史

(26) 『枕草子』／清少納言／随筆 / 平安時代中期に成立した、日本で最初の随筆といわれる作品

(27) 類聚的章段（ものづくし）／例＝「うつくしきもの」「すさまじきもの」「はしたなきもの」など。 / 『枕草子』の章段は、類聚的章段・日記的章段・随想的章段の三つに分けて説明されることが多い

(28) 中宮定子（藤原定子） / 一条天皇の中宮。『源氏物語』が「もののあはれ」の文学と言われるのに対し、『枕草子』は「をかし」の文学と呼ばれ、この中宮のもとでの明るい宮廷生活が描かれている

【現代語訳（全文）】

しゃくにさわるもの。急ぎの用事があるときにやって来て、長話をする客。気軽に扱える相手ならば、「またあとで」とでも言って帰してしまえるのだが、そうはいっても、こちらが気おくれするような立派な相手だと、たいそうしゃくにさわって不愉快だ。

硯に髪の毛が入ったまま墨をすられているの。また、墨の中に石がまじっていて、きしきしときしんで音を立てているの。

急に病気で苦しむ人があるので、験者を呼び求めるのに、いつもいる所になくて、よそへ探し回っているうちに、待ち遠しく時間ばかりがたって、やっとのことで（験者を）つかまえて、喜びながら加持祈祷をさせると、このごろ物の怪の相手ばかりしていて疲れきってしまっているのだろうか、座るとすぐに眠そうな声であるのは、まったくしゃくにさわる。

眠たいと思って横になっているところに、蚊が細い声でいかにも心細そうに、自分の名を告げるように鳴いて、顔のあたりを飛びまわる。（あんなに小さい体なのに）羽ばたきの起こす風までもがその体の大きさ相応にあるのは、本当にしゃくにさわる。

蚤もとてもいやなものだ。着物の下で跳ねまわって、着物を持ち上げるようにする。